

「まんじゅう」で防災意識を継承

長崎市山川河内(さんぜんこうち)地区・150年前の水害の記憶をつなぐ



2013年元日の西日本新聞刷別「災害伝承」で紹介された「まんじゅう配り」の記事。

〔災害伝承〕念仏講まんじゅう、消防科学総合センターほか
 長崎市の東、南に橋湾天草灘を望む緑豊かな太田尾町山川河内(さんぜんこうち)地区。ここでは1982年7月に発生した長崎豪雨災害の際、土石流が発生し家屋等に被害を生じたものの、自主避難等により一人の負傷者も出ませんでした。

山川河内地区では、江戸時代末期の万延元年(1860年)に土砂災害が発生し、33名もの犠牲者が出た過去があります。以来、この地区では、この災害で亡くなられた方々を供養し、災害を忘れないために、行方不明者の捜索を打ち切った翌日の14日を月命日として、災害による犠牲者を弔うまんじゅうを全戸に配る「念仏講まんじゅう」が行われるようになりました。

we support!
RQ
 災害教育センター

MONTHLY

「東北に黒龍を送ろう! 大作戦しんぶん」改め
 復興支援『すけさきた』
 かめばいん
しんぶん

「すけさきた」とは
 宮城県登米市あたりの言葉で
 「ボランティアに来たよ」という
 意味である

JUNE
11
 2016



長崎豪雨災害(長崎大水害)1982年(昭和57年)7月23日から翌24日未明にかけて、長崎県長崎市を中心とした地域に発生した集中豪雨、およびその影響による災害である。斜面都市としての長崎市の特性が災いし、「水害」の名とは裏腹に土砂災害による犠牲者が大きく上回ったのが長崎大水害の特徴で、長崎市内の死者・行方不明者299名のうち、およそ9割にあたる262名が土石流や崖崩れによるものであった。

念仏講まんじゅうは、万延元年に発生した土砂災害の経験を契機に始められた、いわゆる「新しい災害伝承」です。しかし、明治・大正・昭和の戦前・戦後の激動の時代も含め、砂防堰堤等が整備された今なお約150年もの間、工夫を重ねながら続けられているこの行事は、住民が土砂災害を自身のリスクとして理解し、地域の「絆」を育みそれを引き継いでいる事例のひとつと言えるのではないのでしょうか。

宮古島から宮城県へ、被災船の里帰り



同県水産振興課の増田義男技術主査は「もうないものと思っていたので、連絡を受けたときは驚いた」と話し「竣工式では、同船が降ろされるところを皆さんに披露し、その後は教材などにしたい」と、活用方法を検討している。

「海翔丸」は船体にうっすらと残っていた漁船登録番号から気仙沼試験場の船と判明した。

〔宮古毎日新聞〕宮城県で東日本大震災に被災し、今年5月12日に宮古島、上野博愛漁港の沖合で発見された被災船「海翔丸」が2日、保管されていた博愛漁港から、所属する宮城県水産技術総合センター気仙沼試験場に向け出発した。海路で東京まで運ばれ、そこから陸路で気仙沼まで輸送される。発災から5年余りの漂流を経ての里帰りとなる。

東日本大震災で被災した宮城県水産技術総合センター気仙沼水産試験場が復興し、8日に竣工式が行われる。この竣工式に「海翔丸」を同震災のモニメントとして展示、その後は同船が漂流していたことから、海洋循環の教材として活用することなどが検討されている。

宮古島から宮城県へ、被災船の里帰り